

【論文】

山門檀那院と近江菅浦

水野 章二

はじめに

中世前期までの文書は、そのほとんどが寺社や公家・武家の領主が残したものであるが、中世後期に入ると、村落に伝えられた文書も少しずつ増加する。そのなかでも唯一、国宝に指定されているのが、近江湖北の菅浦に伝えられた菅浦文書である。^①中世村落研究には不可欠の文書であり、膨大な研究が重ねられてきた。分析され尽くした文書に思えるが、実際には全く未解決な課題も多く残されている。とりわけ重要と思われるのが、領主であった山門檀那院の問題である。檀那院の実態や、その上に位置した梶井（梨本）門跡との関係を掘り下げた研究はほとんどなく、末寺とされている竹生島との関係もはっきりしていない。支配の骨格が不明確なままとなっているのである、本稿では、山門檀那院の性格を明らかにするための基礎的な検討を行いたい。竹生島および檀那院に代わって中世後期に登場する花王院については、別稿で扱う。

一、協門跡檀那院

中世最大の寺社勢力である比叡山延暦寺（山門）は、巨大な宗教的ネッ

トワークの頂点に位置する権門である。延暦寺は三塔（東塔・西塔・横川）という三つのエリアからなるが、檀那院はそのうちの東塔東谷に属した。天正二年（一五七四）成立の山門関係注釈書「騫驢嘶余」^②は、東塔東谷について、「仏頂ノ尾、檀那院西谷也、檀那院、梶井殿協門跡御座アリタルニヨリ号檀那院」とする。東谷は仏頂尾と檀那院の二地区からなっており、檀那院は梶井の協門跡檀那院があったために、そのように呼ばれるというのである。なお檀那院の西にあった仏頂尾は、菅浦と並ぶ惣村研究の最重要フィールドである得珍保今堀郷の領主である。

門跡・協門跡について確認しておこう。中世寺院内部には、寺院大衆の和合の精神をたてまえとする公的な機構としての寺家の組織と、私的な子弟・門流としての集団原理による院家の組織が存在した。^③院政期より、摂関家出自の僧が相次いで南都北嶺の諸寺に入り、寺内諸院家の院主となって、院家を継承するようになる。このような相承の積み重ねから、貴種が入寺する院家が、次第に門跡と呼ばれるようになる。^④延暦寺の場合、梶井・青蓮院・妙法院の三門跡が交代で天台座主に就任し、実質的な支配を担う体制は一二六〇年代に成立する。^⑤三つの門跡がそれぞれ、多くの門徒や経済的基盤である莊園・所領、末寺などを支配下に置き、相互補完的に延暦寺全体を支配する体制が確立するのである。

「騫驢嘶余」からは、三門跡・協門跡・院家・出世・坊官・持法師などのさまざまな寺院内身分があったことが知られるが、問題は檀那院が位置づけられる協門跡である。鎌倉時代末から室町時代に及ぶ僧俗の故実書「海人藻芥」には、「山門三門跡者、梶井・青蓮院・妙法院、是也。此外ノ門跡モ亦拜任座主跡是多シ。浄土寺・竹内曼殊院・岡崎・東南院・檀那院・積善院・毘沙門堂等也。此外若出身ノ輩有之者、可拜任者也」^⑥

とある。ここでは脇門跡という呼称は用いられていないが、三門跡に次いで「此外ノ門跡」として名があげられている浄土寺以下の七門跡が、それにあたる。脇門跡の門主は、座主の有資格者であり、三門跡に準ずる地位を占めていた。^⑦戦国期の「細川家書札抄」^⑧にも、「諸門跡座主御衆」として、三門跡とともに、檀那院・浄土寺・岡崎・竹内・毘沙門堂があげられており、元亀二年（一五七二）の「素絹記」^⑨には、梶井に関連して、「檀那院等、是号脇門跡」とする。檀那院の場合、一〇九世親源および一五二世相殿の二人の座主を輩出している。^⑩

ここで注意したいのは、天永年中（一一一〇～一一三）より応永年中（一二九四～一四二八）に至る約三〇〇年間の青蓮院の諸記録を集成大成した『門葉記』^⑪の記述である。同一四二には、「青蓮院、梨下又号梶井、妙法院、浄土寺号金剛寿院、本覚院付日光、妙香院横川一谷管領之、東陽房号十楽院、是洛陽坊名也、曼殊院北野別当相承之、付東南院、毘沙門堂、靈山、裏築地号般若院、岡崎号実乗院、已上皆是山務経歴門跡也」として、三門跡やその他の門跡の系図が書き上げられている。「山務」とは、延暦寺の統括者である天台座主のことであるが、ここに檀那院の名はない。それに代わって靈山があげられ、「靈山以往可尋之」として、公誉以下五名の系図が記載されている。次章でふれるように、享和三年（一八〇三）に編纂された『華頂要略』の一四五中絶門跡伝（以下、門跡伝と略す）に、檀那院の系譜が掲載されているが、靈山の系図は、完全にこのなかに組み込まれている。「以往可尋之」という注記は、公誉以前が不明確であったことを示しているが、のちには檀那院の系譜と接続されているのである。前述した二人の天台座主も、靈山系図に載る人物であった。檀那院は靈山と一体化して、脇門跡とみなされるようになったと思われる。

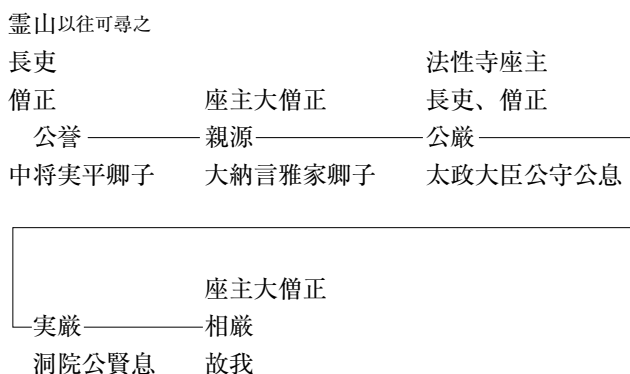


表1 霊山山務

るが、本章ではまず、その基本的性格を確認しておきたい。

檀那院の創建については明確である。文永一二年（一二七五）頃成立した『阿婆縛抄』^⑫の「諸寺縁起（諸寺略記）」には、「三院記」・「三塔諸寺縁起」などと表記される最も古い延暦寺諸堂の記録が含まれる。^⑬東塔檀那院は次のように記されている。

檀那院十禪師

脇門跡はそれぞれ三門跡の配下に属していた。応永一九年（一四一二）三月の足利義満子息義承の梶井（梨本）入室の際、戒師を勤めたのは「檀那院僧正相殿^{梨本脇門跡}」（『天台座主記』）であった。菅浦文書にも、「山門檀那院領、梶井二品親王家御門跡御管領之地也」（『菅』一三二）など、梶井門跡との関係を強く意識した表現がみられるのである。脇門跡の多くは廃絶し、檀那院も史料を伝えていないため、その実態はほとんど明らかになっていない。院主の系譜については次章で詳述す

葺檜皮三間四面堂一字

安置一尺五寸釈迦 弥陀 薬師 如意輪 五大尊 毘沙門等像

葺檜皮三間四面堂一字

五間一面大衆屋一字

六間三面納殿一字

右院、律師興良の房で、始自天元二年八月十日至于同年十月十八日七十箇日之間、於件房勤修如意秘法、奉祈御念成就之由、誓願降誕平安之由、爰同三年六月一日、安穩太子降誕。然則以件堂永為御願所、久奉祈宝祚。仍十口僧交名相共進上如件。

檀那院は律師興良の房で、天元二年（九七九）八月一日より、円融天皇の皇子誕生を祈願して如意輪供が修され、皇子懷仁（のちの一条天皇）生誕後は御願寺として、一〇口の僧が置かれたというのである。

嘉元三年（一一三五）の奥書を有する「山門堂舎記」⁽¹⁵⁾や、永和五年（一二七九）には成立した「叡岳要記」⁽¹⁶⁾もほぼ同内容であり、延暦寺の諸記録は、一致して檀那院は興良の房から発展して御願寺になったと説く。水戸彰考館蔵二冊本「僧綱補任」から、檀那院根本の興良は慈恵（良源）の弟子で、承平二年（九三二）得度、天延二年（九七四）内供奉十禅師、寛和二年（九八六）権律師、永延元年（九八七）少僧都、同二年入滅などの経歴が判明する⁽¹⁷⁾。また「護持僧補任」⁽¹⁸⁾は、一条天皇の身体護持のために祈祷を行う護持僧として、「山（山門、以下同じ）興良権少僧都檀那院、慈恵大師弟子、寛和二年十二月二十五日任権律師御持賞、永延元年三月十日任少僧都御持賞、永延二年十月十一日卒七十七」と記す。興良は延暦寺の発展に辣腕を振るった良源の弟子であり、皇子降誕祈禱

や護持僧としての功績によって、自坊を御願寺檀那院としたのである。門跡伝は、「始諱千良、住西塔後住東塔東谷、慈念・慈恵弟子」とする。院家の継承の際に重視されたのが法脈・師弟関係で、興良に続くのが覚運である。覚運は良源および興良の弟子で、檀那院に住して盛んに教学を講説した。『尊卑分脉』の注記には、「山 少僧都 号檀那贈僧正」とある。「僧綱補任」⁽²⁰⁾から、「天台宗、延暦寺、興良僧都弟子」で、長保二年（一一〇〇）に法橋、同五年に権少僧都に任ぜられたことなどが知られる。多くの著作を残した優れた学僧で、寛弘四年（一一〇七）に没した際には、「仏法棟梁、国家珍宝也、今聞逝去、悲淚灑襟」（『権記』同十一月一日条）と記されたほどであった。死去にあたって僧正を贈られ、『日本紀略』治安元年（一一二二）五月二七日条には、「贈大僧正覚運、依一条院并入道相国^{（藤原道長）}之師也」とある。その教学の系統は檀那流として、源信の恵心流とともに天台教学の重要な法流となった。多くの記録や各種の高僧伝などに事跡が綴られており、門跡伝にも記述は多い。

『小右記』長和元年（一一二二）五月二三日条では、藤原顕信の受戒に参列するため、藤原道長らの公卿の一行が比叡山に登山した際、檀那院辺で投石され、裏頭の法師五・六人が「こは檀那院ぞ、下馬所ぞ、大臣公卿は物故は知らぬ物か」と言ったという。『御堂関白記』同日条にも、「檀那院上方有放言僧、以石打人云々」とみえており、宗教上の行動ではあるが、檀那院に対する寺僧の意識もうかがえる。檀那院は康和元年（一一〇九）一一月一八日に失火によって焼失し、同三年に再建された⁽²¹⁾。また融通念仏の祖とされる良忍（一一七三～一二三二）は、二〇歳から三一歳まで、檀那院実報房にいたことが確認されている⁽²²⁾。

平安期における寺院組織や所領などはほとんど不明といつてよいが、

長元八年（一〇三五）十一月五日檀那院領衣川蘭作田注文⁽²³⁾から、衣川蘭が檀那院の所領であったことが確認できる。衣川は比叡山地東側の琵琶湖西岸にあたり、延暦寺膝下の地である。建久三年（一一九二）十一月檀那院検校権律師実遍紛失状案は、「寿永二年法住寺殿逆乱時」に、「当院領諸国所在末寺庄園等官符・宣旨・次第証文等」が紛失したため、その証明を求めたもので、左京職の与判がなされている。寿永二年（一一八三）に、後白河院が院政を執り行っていた洛東の法住寺殿が、木曾義仲によって焼かれるという事件が発生したが、その際に末寺・荘園の証文を紛失したのである。この文書は、菅浦と園城寺円満院領大浦荘の相論の際に、証拠として提出された具書の一部であり、竹生島が菅浦を「不斷常燈所進地」としていた証拠とされている。竹生島の記述に関する部分は不自然な点を感じられるが、左京職が与判した紛失状が存在したのは間違いなのである。このような文書が作成されたのは、後述するように、京都東山に檀那院の活動拠点となる寺坊が存在し、そこが被災したためと思われる。実遍は檀那院主の系譜に登場する。

鎌倉期以降になると、菅浦文書などによって、もう少しその組織が明らかとなる。建長四年（一二五二）二月一日檀那院政所下文〔菅〕二六・二二、「鎌」七五〇一は、檀那院政所の院司僧が、菅浦に乱入した行忠に従ってほならない旨を百姓に命じたものである。檀那院には政所が置かれ、院主⁽²⁴⁾・検校（別当）を頂点に院家が運営されていた。延慶二年（一三〇九）七月、菅浦をめぐる大浦荘との争いの際に、「当寺^(北畠)者吾山^(北畠)靈閣累代之御願也、本寺之滅亡者供僧之鬱念也」として、檀那院供僧が伏見上皇の院宣を求めたように〔菅〕三三四・七四五、「鎌」二二七三九、檀那院には供僧が置かれ、公人も組織されている〔菅〕

六三六）。檀那院の構成員は、檀那院衆徒と呼ばれていたが〔菅〕一六一・六二七など）、重要問題が起きると集会が行われ、意思統一が図られた。正和五年（一三一六）九月二五日の檀那院集會では、越前における十禪師御簾神人殺害事件の犯人逮捕が要求されており〔鎌〕二五九三七）、菅浦に関しても、何度も檀那院集會が行われている〔菅〕八三・九〇・一〇六・一一五・二八一など）。なお前述した「山門堂舎記」などに記述はないが、檀那院には尊宝院と呼ばれる堂舎が附属しており、集會の場ともなっていた〔菅〕九二・九三・一三〇）。

所領については、菅浦以外は史料が乏しい。菅浦は面積からいってもさほど経済的収益はなく、当然他に莊園・末寺が附属していたはずであるが、院主が個人として伝領したと思われる所領は散見されるものの、所領の全貌は全くつかめない。末寺についても、「檀那院末寺近江国竹生嶋領菅浦」〔菅〕六二九へ）など、菅浦に領主権を有する竹生島が確認できるだけである。竹生島は複雑な湖流が発生し、風の影響も強く受ける航路上の難所である。そのため、古くから信仰の対象となってきた。天台の勢力が早くから及び、浅井郡全体の祭礼として現在まで受け継がれてきた蓮華会も、良源が成立に深く関わっていた。湖北大浦湾を主要な生活空間としていた菅浦にとって、湾の入口を押さえる竹生島は決定的に重要な存在である。門跡体制確立以降の菅浦支配の基本は、梶井門跡の下で、本寺・本所檀那院―末寺領主竹生島となっていた。門跡は徴税権などには有しておらず、日常的な支配は檀那院までで完結しており、そこに供御人役に関わる蔵人所・内蔵寮などの支配系列が重なってくるのである。なお山門領であるため、日吉社との関係も随所にみられ、前述した正和五年（一三一六）の十禪師御簾神人殺害事件にあたって、檀

那院で集会が行われたのは、東塔東谷が十禪師社を管領していたためである。⁽³¹⁾

二、平安・鎌倉期の檀那院系譜

門跡伝では、檀那院について「檀那院靈山、属于梶井門跡云々」と始まり、興良―覚運―長算―仁暹―長愉―公誉―親源―雲助―公嚴―実嚴―相嚴―実承―寛家―良証―澄嚴という順番で、歴代の院主名が簡単な出自・略歴とともに記されている。これを収録する『華頂要略』は、多くの中世史料を用いた青蓮院門跡の寺誌で、延暦寺を考える上での基本史料となっているが、編纂自体は近世であり、慎重な検討が必要となる。

この系譜で、実承は「正応五年二月十一日補護持僧」と記されているが、五代前の親源に「嘉元二年十月廿日補護持僧」「元亨三年三月廿三日補天台座主」などの記述があり、実承の方が年齢が高いと判断されるなど、継承順に明らかに矛盾がある。公誉には「第一門葉記云、按一門跡第一歟」と朱注され、親源・公嚴・実嚴・相嚴それぞれに、「二」から「五」までの数字が朱で記されている。冒頭には「同門葉記曰、檀那院号靈山」として、公誉―親源―公嚴―実嚴―相嚴の『門葉記』靈山門跡系図が載せられており、対応関係が明示される。靈山門跡と檀那院の系譜が接合されているのである。

基本史料はもう一点存在する。「四王院・持明院・檀那院・安居院歴代略記」(叡山文庫蔵、以下、歴代略記と略す)は、文化一〇年(一一八三)八月に比叡山の法曼院大僧都真超⁽³²⁾が魚山(大原来迎院)如来藏本を写したもので、檀那院を含む延暦寺東塔に属した四院家の院主の名とその出

自・略歴が記されている。檀那院は、覚運―長算―仁暹―経寿―親快―静兼―相豪―良喜―実遍―良基―長尋―公誉―長愉―隆性―実雲―公誉―実承―雲助―親源―俊承―親嚴―公嚴―実嚴―相嚴―証嚴―胤海となっている。仁暹から親源までの間は、門跡伝では二代となっているが、歴代略記では一五代に及び、はるかに詳しい。『尊卑分脉』などの記事と照らし合わせても、院主の信憑性は高いのである。一方、歴代略記では、相嚴以降は二代の記述しかない。しかも証嚴は全く記事を欠き、胤海は近世の人物のため、室町後期はほとんど情報はない。歴代略記は、前半部分は門跡伝を補う詳細な系譜であるが、混乱もあり、出自・経歴などの記事は門跡伝に較べて、より簡略で、誤りも多い。なおどちらの系譜にも、院主の就任・退任の時期などは記載されていない。

この二つの系譜やその他の史料から、(1)興良―(2)覚運―(3)長算―(4)仁暹―(5)経寿―(6)親快―(7)静兼―(8)相豪―(9)良喜―(10)実遍―(11)長愉―(12)長尋―(13)隆性―(14)公誉―(15)実雲―(16)公誉―(17)実承―(18)親源―(19)雲助―(20)公嚴―(21)俊承―(22)実嚴―(23)相嚴―(24)良証―(25)澄嚴という、おおよその系譜を推定した。まず平安・鎌倉期について、その論拠を確認していきたい。

檀那院主の継承順と生没年、生没年が不明な場合は年次のわかる宗教活動など、および出自を整理したのが、表2である。(1)興良および(2)覚運についてはすでにふれた。(3)長算は『尊卑分脉』の注記に、「山、探題、北野別当、檀那寺〔院〕、歌人、権大僧都、密皇慶資、顕覚運僧正資、母筑前守兼清女、天喜五五々入滅六十七」、「僧綱補任」では、天喜五年(一一〇五)条に「前大僧正長算、六月三日入滅⁽³³⁾、九条殿孫、

| 檀那院 継承順 | 院主名 | 生没年・活動歴など | 出自 |
|------------|-----|---|--|
| 1 | 興良 | 延喜11年(911)―永延2年(988) | 尊卑分脉記載なし |
| 2 | 覚運 | 天曆7年(953)―寛弘4年(1007) | 春宮大進藤原貞雅男 |
| 3 | 長算 | 正暦3(992)―天喜5年(1057) | 従四位少納言藤原朝範男 |
| 4 | 仁暹 | 長保3(1001)―治暦3年(1067) | 正四位下越前守源長経男 |
| 5 | 経寿 | 長元6(1033)―応徳元年(1084) | 正四位下越前伯耆陸奥等守皇后宮 権大夫藤原良経(?―1058)男か |
| 6 | 親快 | 『阿婆縛抄』永保3(1083)三條内裏安鎮日記 | 正三位右衛門督中納言藤原良頼 (1012―48)男 |
| 7 | 静兼 | 『中右記』嘉保2年(1095)阿闍梨 | 従五位下伊勢守藤原時経(?― 1076)男 |
| 8 | 相豪 | 「僧綱補任」保安5年(1124)夜僧・檀那院檢 校、『阿婆縛抄』長承2年(1133)冥道供 | 正四位下権中納言大宰帥左兵衛督 藤原資仲(1021―87)男 |
| 9 | 良喜 | 『門葉記』応保元年(1151)曼荼羅供、『僧綱補 任』長寛2年(1164)法橋 | 正四位下能登守大藏卿左京大夫持 明院通基(1090―1148)男 |
| 10 | 実遍 | 建久3年(1192)檀那院檢校 | 正三位参議中将藤原公隆(1103― 53)男 |
| 11 | 長愉 | 『阿婆縛抄』建保2年(1214)・建保4年(1216) 安鎮法 | 正三位勘解由長官造東大寺長官参 議藤原定長(1149―95)男 |
| 12 | 長尋 | 長愉は叔父 | 従三位左京大夫藤原清長(1171― 1214)男 |
| 13 | 隆性 | 『阿婆縛抄』建保2年(1214)・建長3年(1251) 安鎮法 | 従三位皇太后宮権大夫藤原隆雅男 |
| 14 | 公誉 | 正元2年(1260)起請文、天台座主公円(1168 ―1235)・公豪(1196―1281)弟 | 正二位左右大臣三条実房(1147― 1225)男 |
| 15 | 実雲 | (「五壇法日記」)嘉禄元年(1225)―?、『経俊 卿記』建長5年(1253)法勝寺供養、弘安6 (1283)首楞嚴院檢校 | 従一位太政大臣三条公房(1179― 1249)男 |
| 16 | 公誉 | (称名寺聖教)寛喜元(1229)―?、『民経記』文 永4年(1267)・弘安9年(1286)五壇法、正応 3(1290)首楞嚴院檢校 | 正三位左中将三条実平(1197―?) 男・従一位右大臣三条実親(1195― 1263)猶子 |
| 17 | 実承 | 正應五年(1292)護持僧、首楞嚴院檢校、正安 3年(1301)僧正 | 正二位内大臣三条公親(1222―92) 男 |
| 18 | 親源 | (三千院円融藏文書目録)延応元(1239)―(歴 代略記)元弘2年(1332)、徳治3(1308)首楞 嚴院檢校、元亨3年(1323)天台座主 | 正二位権大納言北畠雅家(1215― 68)男・正二位大納言久我雅忠(1228 ―72)猶子か |
| 19 | 雲助 | 『門葉記』永仁6年(1298)法印権大僧都、 「任僧綱土代」乾元2(1303)権僧正、正和2 (1313)首楞嚴院檢校 | 従一位右大臣西園寺公基(1220― 74)男 |
| 20 | 公嚴 | 「任僧綱土代」正安4年(1302)権律師、嘉暦4 年(1329)祇園感神院前別当、康永(1342～45) 首楞嚴院檢校 | 従一位太政大臣洞院公守(1249― 1317)男 |
| 21 | 俊承 | (歴代略記)嘉元元年(1303)―?、醍醐寺賢俊 (1299～1357)の弟 | 正二位権大納言日野俊光(1260― 1326)男 |
| 22 | 実嚴 | (「山密往来」)暦応元(1338)―?、康暦元年 (1379)「結縁灌頂記」檀那院大阿闍梨、嘉慶2 (1388)首楞嚴院檢校 | 従一位内大臣洞院実夏(1315―67) 男 |
| 23 | 相嚴 | (「雑々例」)延文元(1356)―?、明德(1390～ 94)首楞嚴院檢校、天台座主(1414―19) | 従一位太政大臣久我通相(1326― 71)男 |
| 24 | 良証 | (三千院円融藏文書目録)応永13(1406)―?、 『建内記』正長元年(1428)ほか五壇法、嘉吉元 年(1441)首楞嚴院檢校交代 | 不明 |
| 25 | 澄嚴 | 『親長卿記』長享元年(1487)檀那院法眼澄嚴 大僧都事、久我大納言弟 | 従一位太政大臣久我通博(1426― 82)男 |

表2 檀那院主一覧

朝範子、号檀那院^(僧都職)、覚雲入室⁽³⁵⁾とある。門跡伝からも、長算が覚運から檀那院を継承したのは間違いないく、『本朝高僧伝⁽³⁶⁾』でも、比叡山で「覚雲」に師事し、檀那院に住したとある。

(4) 仁暹は、『尊卑分脉』に「山、法性寺座主、大僧都、檀那院」、「僧綱補任」では「天台宗、延暦、檀那院、長経男」などと記され、康平六年(一〇六三)に権大僧都に至り、治暦三年(一〇六七)六八歳で入滅する。後冷泉天皇の護持僧でもあった。門跡伝は、「備前守源長経男、長算弟子、法性寺座主、北野別当、兼曼殊院敷不審、治暦三年九月十三日寂六十七才」として、曼殊院との関係に疑問を呈している。『華頂要略』三二門下伝には、始祖是算―暹円―教円―長算―仁暹とつながる脇門跡曼殊院の系譜が記され、前述した『門葉記』の「曼殊院山務」でも、教円から始まり、長算・仁暹へとつながる系図がみられるのである。観応元年(一二三〇)八月一日太政官牒は、この時期には曼殊院主が兼務していた北野宮寺別当職について、「教円讓長算、長算讓仁暹、仁暹讓頼円」などの「師資之讓任」の経過を詳述している。曼殊院は、現在は京都洛北に位置する天台門跡で、成立期の状況は不明な点が多く、曼殊院という名称の院家が確実に存在するのは、鎌倉末期まで下り、摂関家に次ぐ清華家の家格である洞院家出身の貴種入寺と同時にする見解もある⁽³⁹⁾。長算・仁暹と檀那院の関係は明白であるが、一方で北野宮寺別当職の継承にも関わっていた⁽⁴⁰⁾。そのため、のちに曼殊院の系譜が作成されるにあたって、遡って長算・仁暹も組み込まれたのである。

(5) 経寿は、「僧綱補任」には、康平二年(一〇五九)に法橋に叙せられた際に、「天台宗、延暦寺、経輔胤子、皇后宮於法性寺籠御次、寺家別当仁暹賜賞、替以弟子経寿奏申被賞、「廿七」(朱)」、延久元年

(一〇六九)条に「法橋上人位「檀那院」(朱)経寿」とみえ、応徳元年(一〇八四)に卒している⁽⁴¹⁾。仁暹の弟子であり、檀那院との関係も確実であろう。(6) 親快は「山、経寿法橋附属、阿闍梨、檀那院」(『尊卑分脉』)とあり、経寿からの継承である。永保三年(一〇八三)二月一日に、三条内裏で三六世天台座主良鎮(梶井門跡)が安鎮法を修した際、親快阿闍梨が参加しており(『阿婆縛抄』二二〇)、この人物としてよいであろう。(7) 静兼は『尊卑分脉』に「山、阿闍梨、檀那院」とあり、檀那院の継承者と推定できるが、師弟関係ははっきりしない。『中右記』嘉保二年(一〇九五)二月二十八日条に「阿闍梨静兼」の名がみえる。なお康和三年(一一〇一)二月に、焼失した檀那院を再建した功によって権律師への補任を求めた阿闍梨伝灯大法師は、静兼であった可能性が高い。

(8) 相豪は、『尊卑分脉』に「山、阿、金剛寿院檀那院別当、尋仁法眼附属、雙巖坊」、「僧綱補任」保安五年(一一二四)条に「正月十四日夜僧事、金剛寿院檀那院檢校」とある。檀那院とともに記された金剛寿院は、『華頂要略』三二門下伝によれば、青蓮院の脇門跡であった浄土寺の山上本坊で、浄土寺は文明一年(一四七九)に足利義政によって廃され、そのあとに銀閣が営まれたという。明教―行覚―覚尋―尋仁―相豪―仁操と継承されたが、相豪は何らかの理由で檀那院主にもなったようである。(9) 良喜は、『尊卑分脉』に「良基、山、阿闍梨、喜改、仁操僧都附属、檀那院、阿弥陀院」と注記され、檀那院主と判断できるが、子弟関係では金剛寿院・浄土寺系統の仁操(白河院甥)の弟子であった⁽⁴⁵⁾。『門葉記』三七によれば、五壇法の勳賞によって永暦元年(一一六〇)に法橋に叙せられている。

(10) 実遍は、『尊卑分脉』に「山、権律師、阿弥陀院検校、号檀那院、良喜法眼附属」とあり、良喜から檀那院と阿弥陀院を継承したと判断できる。問題は阿弥陀院である。建久三年(一一九二)の実遍紛失状案は、戦火による所領文書紛失のために作成されたものであった。のちに詳述するが、実遍が活動拠点を置き、檀那院の文書を保管していたのが、この阿弥陀院と思われる。(11) 長愉は、門跡伝では名のみが記されているが、『尊卑分脉』では「定瑜、山、法印権大僧都、改長」、檀那院、又阿弥陀院、歴代略記には「参議定長卿男、法印大僧都」とある。(12) 長尋は、「山、法印権大僧都、檀那院、定瑜附弟」(『尊卑分脉』)と、長(定)愉の弟子で甥にあたる。早世したのか、事跡は乏しい。(13) 隆性は、「山、法印、檀那院、長愉附属」(同)と、長愉との子弟関係にもとづいて檀那院を継承したことが明らかである。建保二年(一二二四)の七二世天台座主承円(梶井門跡)による新造大炊殿(後鳥羽上皇御所)安鎮法や、承久二年(一二二〇)二月一九日の入道親王尊快(後鳥羽院皇子)の伝法灌頂に長輸(愉)と隆性の名がみえ、建長三年(一二五二)六月一二日の閑院内裏安鎮法にも参列している(『阿婆縛抄』二二四・二二五・二二五)⁽⁴⁶⁾。

(14) 公誉からは少し状況が変化する。公誉は左大臣三条実房の子で、「山、僧正、楞嚴院検校、長尋法印附属、檀那院、阿弥陀院」(『尊卑分脉』)のように、長尋の弟子として檀那院と阿弥陀院を継承した。(15) 実雲は、「山、権僧正、横川長吏、日吉別当、檀那院、隆性法印附属」(同)とあるように、師は隆性である。建長五年(一二五三)二月二二日の法勝寺阿弥陀堂供養(『経俊卿記』)や、文永二年(一二六五)一〇月一日・同五年(一二六八)八月一九日・弘安九年(一二六八)六月一八日の五

壇法(『門葉記』三九)などの重要法会に携わっており、弘安六(一二八三)一〇月には、横川の中核堂舎首楞嚴院の検校(横川長吏)に就任する⁽⁴⁷⁾。実雲は従一位太政大臣三条公房の子で、公房の弟が(14)公誉である。実雲の兄実平の子が(16)公誉、別の兄実親の孫が(17)実承となる。「山、実雲資、公豪灌頂、法務、大僧正、檀那院、護持、能筆」(『尊卑分脉』)とされるように、実承は祖父の弟実雲の弟子で、公豪も親族であった。門跡伝は「内大臣公親公息、実雲弟子、正応五年二月十一日補護持僧」、「護持僧補任」では、伏見天皇の護持僧で「山、実承法印檀那院、実雲僧正弟子、内大臣公親公息」と記す。(14) 公誉から(17)実承まで、すべて三条家の出身である。院家の継承は法流・師弟関係が重要であったが、当初は受領クラスだった檀那院主の出身階層は次第に上昇し、この時期には摂関家に次ぐ家格である清華家に固定されていくのである。

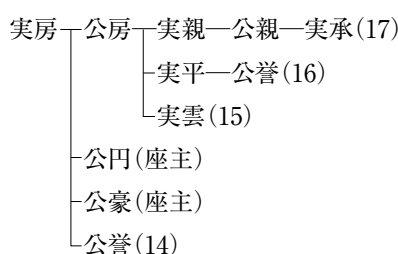


表3 三条家檀那院主略系図

正安三年(一一三〇)に、大浦荘で悪行を働いた百姓が菅浦に逃げ込むという事件が起きる。大浦荘雑掌尊祐は、菅浦に立て籠もった逃散百姓を召し出して重科に処すため、檀那院僧正にその旨を命ずる院宣の獲得を、領主円満院に要請した(「菅」七三九)。三月九日に後宇多上皇側近の坊城俊定に宛てた円満院宮恒助法親王の令旨が出され、同一三日には後宇多上皇の院宣が檀那院僧正に発給される(「菅」二八七)。それとにも円満院の権大僧都玄円から、梶

井の大納言法印に対して、次のような書状も出された。

近江国大浦庄雑掌申、悪行百姓等籠置菅浦之間事、申状副具書如此、
子細載状候歟、忿被経御奏聞、被愁実承僧正、被召出悪党人等候之
様、可有申御沙汰候哉、恐々謹言、

「正安三」三月七日

謹上 大納言法印御房⁽⁹⁾

権大僧都玄円

実承僧正への働きかけを依頼したのであるが、それは当然実承が檀那院主であったためである。延享二年（一三〇九）伏見上皇院宣案が引く「実承僧正状」は、実承が菅浦の訴えを院に執り進めたものであった。

なお備前国軽部荘内山手村や小六条敷地が、梶井門跡で八四・八七世天台座主であった澄覚法親王から、実雲・実承を経て、同門跡の承鎮法親王へと継承されており、のちには京都鹿王院に寄進されている⁽¹⁰⁾。これらの所領は、檀那院とは直接関係のない、個人関係における伝領であったと思われる。

檀那院の性格を考える場合、重要な役割を果たしたと思われるのが、
(16) 公誉である。『尊卑分脉』には、「山、権僧正、檀那坊、楞嚴院検校、号靈山、実親公爲子、尊源真仙両僧正灌頂」とあり、正三位左中将三条実平の子であったが、叔父従一位右大臣実親の猶子となっている⁽¹¹⁾。公誉は檀那院を継承するとともに、靈山と号した。門跡伝には、「第一門葉記云、按門跡第一歟、公誉僧正、中将実平男、横川長吏」とあり、前述したように、これ以降、門跡とみなされるようになったと思われる。公誉は五壇法などの国家的な祈禱や重要法会に多く携わった高僧であり、正応

三年（一二九〇）には、首楞嚴院検校になっている。公誉は多くの著述や聖教の書写を行ったが、それらは靈山で集積・継承されており⁽¹²⁾、靈山は法流の拠点としても明確になっていくのである。

『門葉記』三七によれば、文永四年（一二六七）十一月一日に、皇后宮御産御所五壇法に従事した勸賞として、「法印公誉、以有職一口申寄阿弥陀院」、弘安二年（一二七九）六月二八日の新陽明門院御産御祈においても、「法印公誉、阿弥陀院有職二口」を賜っている。公誉は祈禱の報償として、阿弥陀院に阿闍梨などの有職僧三口を置かせたのである。『とわずがたり』卷三には、「檀那院の公誉僧正、阿弥陀院の別当にておはするに、親源法印といふは大納言の子にて、申し通はし侍るに、かの御堂の桜の枝を一つ乞ひて」という記述がみられる。これは作者後深草院二条が、弘安七年（一二八四）、「有明の月」（後深草院弟性助入道親王と推定）の三回忌のために東山で参籠した際に、祇園社御堂の桜の枝を得た記事である。親源（靈山門跡二代）は二条の父村上源氏大納言久我雅忠の猶子であったが、その師檀那院公誉は阿弥陀院別当と記されている。二条は親源・公誉を通じて祇園社に桜を求め、同社の執行権長吏に布施を与えて、枝に短冊を付した。公誉は祇園社に影響力を行使できる立場にあった。

三、檀那院と靈山・阿弥陀院

では次に、阿弥陀院や靈山がどのような寺院・組織であったのかを検討していきたい。これまでの研究で、阿弥陀院にふれたものは全くない。靈山についても、時衆史の視点から、国阿による正法寺靈山派の成立な

どに着目した研究に限られている。

靈山とは、本来は釈迦が法華経や無量寿経などを説いた霊鷲山の略で、日本では靈山浄土として、理想世界を象徴するものとなった。やがて京都東山三十六峰の一つである鷲山・鷲尾山と結びつけて、山麓周辺を靈山と表現するようになっていく。靈山が史料に現れるのは、一一世紀初頃からである。長徳・長保年間（九九五～一〇〇四）頃に書かれていたと推定される『枕草子』の一九四段には、「寺は壺坂、笠置、法輪。靈山は、釈迦仏の御すみかなるが、あはれなるなり。石山、粉河、志賀⁽³⁴⁾」とある。鎌倉初期の説話集『古事談』巻一―三三や『続古事談』巻二―五九は、長保三年（一〇〇一）に起きた、最高権力者藤原道長の猶子成信と左大臣顕光の子重家の突然の出家を描いている。この経過は、『権記』同年二月三日・四日、三月五日条などにも記されており、当時の人々の驚きがわかるが、剃髪場所選ばれたのが靈山寺であった。また『御堂閼白記』寛弘元年（一〇〇四）三月一八日条に「上卿四人被座靈山寺会」、「日本紀略」同日条は「靈山堂供養」とあるように、大規模な法会が行われており、道長自身も一二日に「見靈山寺」という。靈山周辺の情景は『更級日記』に描かれ、和歌にも多く登場する。⁽³⁵⁾ 古代以来の葬地である鳥辺野に近く、墓地とも深く結びついていた。⁽³⁶⁾ 『兵範記』仁平三年（一一五三）四月二八日条によれば、宇治で急死した「左大臣殿姫君」は、車で京に運ばれ、靈山堂に送られている。

北靈山・中靈山という表現もみられるように、⁽³⁷⁾ 靈山は一定の広がりをもった地域の名称である。風光明媚な地として知られており、⁽³⁸⁾ いくつもの寺院や宗教施設が含まれていた。その一つであった靈山寺は、後白河院中宮徳子の安産祈願を行った「仏事七十四ヶ所」（『山槐記』治承二年

（一一七八）十一月二二日条）にみえており、法然は元久二年（一二〇五）に別時念仏を修している。⁽³⁹⁾

靈山の地には、天台の影響力が強く及んでいた。永万元年（一二六五）八月、興福寺と対立して、末寺清水寺焼打のために、延暦寺の衆徒数百人が群集したのが靈山であった（『源平盛衰記』巻二）。『吾妻鏡』建仁三年（一二〇三）九月一七日条によれば、延暦寺で学生（侶）と堂衆が合戦となって多数の死傷者を出し、堂衆は退散したものの、学生は靈山・長楽寺や祇園などに群居し、重ねて濫行に及ぼうとしたという。建保六年（一二一八）四月、山門末寺の大山寺神人が石清水八幡宮別宮であった宮崎宮の行遍らに殺害される。石清水八幡宮権別当の配流と、殺害地の博多津および宮崎宮を山門領にすることを要求して、延暦寺衆徒が九月に蜂起し、御所防衛の武士と衝突した。衆徒は神輿を棄てて帰山し、「三塔諸堂日吉社頭閉門、又祇園・北野・鞍馬寺・長楽寺・靈山・六角堂等、山門末寺末社同以閉門」という事態になった（『天台座主記』）。祇園社や長楽寺・靈山寺は山門末寺末社だったのである。

南北朝期に入ると、靈山周辺は何度も戦乱に巻き込まれている。『太平記』卷三二は、元弘・建武以来の戦火で焼かれた邸宅や寺院名を記すが、そこには靈山寺や長楽寺・双林寺などがみえる。「建武三年以来記」（宮内庁書陵部所蔵）の文和四年（一一三五）二月九日条は、「大樹今日自西坂本被移鷲尾寺、其勢数千騎」と、尊氏が鷲尾寺に軍の拠点を置いたことを記すが、鷲尾寺は靈山寺のことと思われる。このような状況のなかで、時衆の国阿（一一三四～一四〇五）は、永徳三年（一一八三）に、天台寺院であった靈山寺を旧知の住持光英僧都より譲られ、阿弥陀堂を建立して正法寺と号する。⁽⁴⁰⁾ 靈山上人と呼ばれた国阿は、双林寺・安養寺・

長楽寺などの周辺の由緒ある天台寺院を、次々に支配下に組み込み、のちには国阿を祖とし、靈山正法寺を本寺とする靈山派と、同じく国阿を祖とし、双林寺を本寺とする国阿派が形成される。靈山地域には、国阿の登場以前から、六条道場の塔頭である靈山道場行福寺を拠点に時衆集団が活動を進めており、「祇園執行日記」に頻出とする靈山聖も、この集団に関わるとい⁽⁶⁵⁾う。

前章でふれたように、『尊卑分脉』からは、少なくとも(9)良喜や(10)実遍、(11)長愉・(14)公誉が阿弥陀院主であったことが推測できた。(16)公誉も、『とわずがたり』に阿弥陀院別当とされている。仁平元年(一一五一)に成立した藤原宗友「本朝新修往生⁽⁶⁶⁾伝」に、「沙門定兼者、延暦寺之住侶也。後移東山阿弥陀院、此寺置不斷念佛白川女御所被始置也。年紀可尋。定兼身為供僧、久勤寺役」とあり、「偏念弥陀」じて、保延六年(一一四〇)八月二十四日に往生したという。近世に編纂された「本朝高僧伝」江州叡山沙門定兼⁽⁶⁴⁾も同内容で、「叡山住侶也。後為阿弥陀院供僧、院在東山。白河后建立令修不斷念仏之地也」とする。問題となるのは、阿弥陀院と深く関わる「白川女御」「白河后」であるが、これは平清盛の出生と深く関係する白河院の寵姫祇園女御のことではないだろうか。『中右記』長治二年(一一〇五)一〇月二六日条には、「今日号院女御之人、於祇園南边建立一堂、(中略)件堂祇園巽角立一堂、安置丈六阿弥陀仏、堂莊嚴鉢金銀滿珠玉、華麗之甚、不能記尽云々⁽⁶⁵⁾」とある。祇園の巽角は、方角的には靈山と一致し、祇園女御が建立した阿弥陀仏を安置した堂が、阿弥陀院につながる可能性がある。

定兼については、これ以上は不明であるが、平安末の東山に延暦寺と関係する阿弥陀院が存在したことは間違いない。(9)良喜以降の檀那

院主が兼務していく阿弥陀院は、この寺院であろう。⁽⁶⁷⁾前述したように、寿永二年(一一八三)の法住寺殿での戦乱で、(10)実遍が檀那院の所領文書を失ったのは、阿弥陀院が檀那院と一体化していたためである。門跡の所領などを書き上げた正中二年(一二三五)一月二五日梶井門跡領勘注状并承鎮法親王付属状(三千院文書)には、「檀那院付阿弥陀院」とされている。

『勘仲記』弘安二年(一二七九)二月二日条には、「今朝河東鷲尾・阿弥陀院・雲居寺已下辺境花叡覧」、「実躬卿記」永仁三年(一二九五)閏二月一七日条にも、「鷲尾并阿弥陀院等花歴覧了」、同一九日条に「今日為花歴覧臨幸東山、謂鷲尾・阿弥陀院・長楽寺・雲居寺等也」とある。花の名所東山にあった阿弥陀院は、鷲尾(靈山寺)と近く、長楽寺・雲居寺も近接する。阿弥陀院という名の寺院は、醍醐寺や興福寺・東大寺などにも存在しており、東山靈山の地にあった阿弥陀院は、靈山と表現されるようになっていく。⁽⁶⁸⁾院家として整備・発展していく過程で、他と識別する必要が高まり、(16)公誉以降、靈山は門跡の名称となった。(22)実嚴撰述の「山密往来」を文化元年(一一八〇四)に書写した真超は、その奥書で著者について、「補檀那院別当、兼住洛東靈⁽⁶⁹⁾故号靈山門跡、後補法性寺座主、任大僧正」と記す。檀那院主で洛東靈山に住んだため、靈山門跡と号したとするのである。

表2に明らかなように、檀那院主は(14)公誉から、摂関家に次ぐ清華家の三条家出身者となる。それ以降も、清華家である北畠・西園寺・洞院などの出身者が続く。院主が大・大納言クラスの子弟に固定され、天台座主を輩出するなど、一般の院家とは異なる寺格Ⅱ門跡となっていくのである。三塔の一つ、横川の中堂である首楞嚴院は、嘉承元年

(八四八)に円仁によって創建されたもので、その検校は延暦寺でも重要なポストである。この時期檀那院主は、(15)実雲・(16)公誉・(17)実承・(18)親源・(19)雲助・(21)公厳・(22)実厳・(23)相厳と、高い比率で就任しており、これも門跡化と軌を一にするものと思われる。元亨四年(一二三四)一月一六日前大僧正親源附属状^⑦には、次のようにある。

附属

大恩院

同寺領因幡国石田本新両庄

山階忌日田 山崎「」

伊勢国中樂寺

東塔西谷定光房并府帳等

靈山坊舍并近辺敷地

右、彼院并寺領等、相副次第調度文書等、所令附属太政僧都公厳也、向後□不可有他人之妨、但背遺誠乱行不調之儀出来之時者、不可全譲於附弟者、按察大納言子息中仁撰器量之仁、可被譲附者也、仍附属之状如件、

元亨四年正月十六日

前大僧正「」

これは(18)親源(靈山門跡二代)から、(20)公厳(同三代)への譲状である。師弟関係にもとづく財産譲与であるが、遺誠に背いて乱行・不調があった場合は、親源の一族である按察大納言(北畠親房)の子息に譲るというのである。「靈山坊舍并近辺敷地」などは師の(16)公誉

から継承したものであろうが、大恩院やその寺領因幡国石田本新両荘は、久我家文書中に関連史料が残されており、久我家に関わる所領であったと思われる。門跡化とともに、所領の集積も進むのである。

(16)公誉は檀那院を継承するとともに、阿弥陀院を充実させて、靈山とよばれる院家を展開したため、檀那院と靈山の系譜は重なり合っていく。しかし両者は完全に一致するのではなく、靈山・檀那院の両方を継承した者と、檀那院主のみを継承した者とがいたのであり、ズレも生じている。

檀那院の門跡化は、菅浦にも影響を与えた。菅浦は鎌倉期から大浦との紛争を続けており、当初は供御人支配ルートを通じて相論を闘っていた。しかし(17)実承の事例に明らかのように、正安二年(一二三〇)頃からは檀那院―竹生島が相論の当事者となっていく(菅六三〇)。檀那院の門跡化にともなう政治的力量が高められ、訴訟能力も格段に強化されたのである。

四、南北朝期以降の檀那院

(18)親源は、『尊卑分脉』に「山、楞嚴検校、天台座主、大僧正、護持、檀那坊」、あるいは「山、天台座主、大僧正、檀那院」、門跡伝では「二 親源大僧正号檀那坊、大納言雅家卿息、公誉弟子」として、経歴を詳しく記す。冒頭の二の数字は靈山門跡の二代目であることを示している。『天台座主記』には一〇九世として、「大僧正親源 壇那坊〔院〕治山九箇月、大納言雅家卿息、元亨三年^{癸亥}三月廿三日補任」とある。後二條天皇および後醍醐天皇の護持僧であり、徳治三年(一二三〇)には、

首楞嚴院檢校にも就任している。前述した『とわすがたり』の記事からも、(16) 公譽の弟子であったことは間違いないが、三条家ではなく、清華村上源氏北畠家の出身であった。『とわすがたり』巻一では、同族であった二条の後深草院皇子出産にあたって、「わが方ざまにて、親源法印、聖觀音の法行はせなど、心ばかりは営む」と、実家での祈禱を行ったという。熾盛光法・五壇法など、多くの国家的法会に参加している(『門葉記』六・三九など)。

(19) 雲助は、『尊卑分脉』に「山、大僧正、横川長吏、親源僧正資、檀那房〔院〕とあり、門跡伝には、「親源僧正弟子」とのみ記される。『実躬卿記』嘉元三年(一一三〇五)八月三日条や徳治元年(一一三〇六)九月九日条から、龜山法王御惱御祈や昭慶門院(憲子内親王)落飾に、師の親源とともに参加したことが知られ、正和二年(一一三三)には、首楞嚴院檢校に就いている。正中二年(一一三二五)閏正月の摂津国小戸莊地頭代覚円申状(「鎌」二八九七八)によれば、同莊の領家は山門檀那院僧正、地頭は岡部好禪であった。前掲の元亨四年(一一三二四)親源附属状には見えない所領で、親源はすでに前大僧正であったため、この山門檀那院僧正は雲助と思われる。雲助は清華西園寺家の出身で、個人的に伝領した所領であろう。なお雲助が靈山に関わっていた形跡はなく、靈山門跡親源の下で、檀那院主のみ継承したと考えられる。

(20) 公嚴は、『尊卑分脉』には、「山、僧正、号靈山、法勝寺座主、楞嚴院檢校、檀那坊、親源僧正資」とあり、門跡伝では、「三 公嚴僧正 洞院大相国公守公息、親源僧正弟子、法性寺座主、横川長吏」と、親源の弟子で、靈山門跡第三代であることが示される。清華洞院家出身で、歴代略記には、「山本太政大臣公守公男 僧正」とのみみえる。

一一六世座主尊雲(梶井門跡)が辞任し、次の桓守が就任する間の祇園社の対応を記した嘉暦四年(一一三二九)二月日記写には、「先別当太政法印公嚴」とされ、尊雲の下で祇園社別当を勤めていたことが知られる。祇園社別当は、延久四年(一一七二)から座主が祇園社檢校を兼務するようになったため、座主の交代にともなって出身門跡に属する院家の人物が補任されたが、南北朝期には門跡執事が任じられた。公嚴は、親源の灌頂弟子である尊雲とは近い関係にあったのである。康永年間(一二三二―五)には、首楞嚴院檢校となっている。康永三年(一二三四)二月一九日の文殿廻文によれば、河内国美濃勅旨田に関して北朝の院文殿で評定が行われ、四辻宮少将家雜掌と檀那院僧正雜掌に参対することが命じられたが、この檀那院僧正は公嚴と考えられる。

(21) 俊承は、『尊卑分脉』に「山、法印、大僧都、檀那院、実承僧正弟子」、「日野一流系図」にも「山、法印、大僧都、檀那院」とある。歴代略記には、「康永四年八月廿五日転大僧正四十二才」などの経歴が記されているものの、他の史料とは一致せず、信頼性は高くない。日野家出身で、元弘の変で処刑された従三位権中納言日野資朝(一二九〇―一三三二)や醍醐寺座主東寺一長者賢俊(一二九九―一三五七)の弟であるが、関連史料の少ない人物である。

(22) 実嚴は、『尊卑分脉』に「大僧正、檀那寺、号靈山、楞嚴院檢校、公嚴僧正附弟、母家女房光久朝臣女」、門跡伝には「四 実嚴大僧正 洞院公賢公息異本内大臣実夏公息、母光久女、横川檢校」とある。師である公嚴は、父洞院実夏の祖父実泰の弟となる。『後深心院閑白記』永和三年(一一三七七)五月四日条から、法性寺座主を競望したことが知られ、同年七月四日には、前門主覚叡親王が一七歳で急死したため、後

継の皇子入室を求めた梶井門徒の連署申状に署名している。⁽⁸³⁾ 足利義満が康暦元年（一三七九）一月に、父義詮一三回忌追善の結縁灌頂を等持寺で行った際、他門の高僧学侶のなかでも、「檀那院大アサリ^(阿闍梨)」が門徒らをともなつて参加し、「為北嶺上綱而被助申東寺之威儀之条、今度之美談也⁽⁸⁴⁾」と評されたが、実厳のことと考えられる。応安六年（一三七三）に三六歳で撰述した「山密往来」など、いくつもの著述を残した優れた学僧であつた。「灌頂口訣⁽⁸⁵⁾」の奥書に、「永徳元年霜月廿日於靈山学窓清書畢、此帖殊堅可禁、実厳」とあるように、その多くは靈山でのものである。嘉慶二年（一三八八）には、首楞嚴院檢校となつている。

なお歴代略記では、「実厳 大僧都法印早世」とされており、明らかに誤りである。そこには貼紙が付され、「超私云、実厳洞院内大臣実有公息男、任大僧正、補法性寺座主、撰述書伝法灌頂口決・合行灌頂口決・阿論及抄、今現行而不早世、今記不審也」と朱書されている。これは真超が歴代略記を書写した時に付したもので、「超私云」とは、真超の考証結果を示している。その考証は父親名以外は正しく、撰述書も現存が確認できる。

それとは別に、「超私云、承範僧正重位伝法日並記在之、案実厳入滅相厳未補前歟、但至徳頃也、恒忠、右称檀那院、但寺務斗也」という朱筆の貼紙も付されている。実厳の入滅後、相厳補任前に承範僧正が入るとするのである。承範は、至徳二年（一三八五）の「谷合行許可御伝授記重位」（妙法院蔵）などの多くの著作を残し、⁽⁸⁴⁾ 至徳頃との年代推定も間違っていないが、檀那院との関係は全く見いだせない。承範とあるのは、祇園社別当として活動した承忠と取り違えたのかもしれない。承忠の弟が恒忠である。正二位大納言大炊御門氏忠（一三〇二〜？）の子で、

『尊卑分脉』では、承忠は「山、檀那院、僧正」、恒忠は「山、檀那院」と注記されている。下坂守氏はこの兄弟を檀那院主で、梶井門跡の執事職を勤め、祇園社別当に補任されたとする。⁽⁸⁶⁾ 承忠・恒忠と檀那院の関係については次章で検討したい。俊承から実厳への交代時期ははっきりしないが、⁽⁸⁶⁾ 実厳と承忠・恒忠の活動時期は重なっている。

(23) 相厳は、『尊卑分脉』に「山、檀那坊、実厳僧正資、権僧正、天台座主」とあり、実厳との師弟関係から檀那院を継承したと思われるが、実厳が洞院家の出身であるのに対し、村上源氏久我家出身である。門跡伝は、「五 相厳大僧正檀那院、久我、実厳弟子」と靈山門跡五代を示し、経歴を記す。『天台座主記』も「僧正相厳檀那院、治山六年、久我内大臣通相公息」以下、応永二年（一四一四）の座主補任から同二六年の辞任までの記事を掲載する。歴代略記でも経歴や年齢が記載されているが、「雑々例⁽⁸⁷⁾」での座主就任年齢五九才とは、食い違いが生じている。明徳年間（一三九〇〜九四）には首楞嚴院檢校であつた。

次の史料は、応永一九年（一四一二）に梶井に入室・得度した足利義満子息義承の御教書（「菅」一二五）である。

（端裏書）「梶井殿令旨案 富少路奉書」

檀那院門跡可有御管領之由、被仰下候也、任継謹言、

応永式拾年八月廿九日

法印任繼

進上 太政大臣大僧正御房

太政大臣大僧正とは父親通相が太政大臣であつた相厳のこと、梶井新門主義承が檀那院門跡の管領を安堵したのである。『門葉記』靈山山

務の記述は相巖で止まっており、次第に靈山の語は関係史料から消えていく。それに代わって、檀那院門跡という表現が出現するのである。たとえば『満濟准后日記』では、応永二十一年（一四一四）九月八日条や二月二日条には、靈山相巖僧正とあったが、二七年六月一日条に檀那院相巖、三〇年九月四日条は檀那院僧正相巖、三二年一月六日条は檀那院僧正という表記となる。応永の後半頃には、靈山に代わって檀那院が門跡の表現となっていくのであり、一方靈山は、東山での時衆の活発な動きを背景に、その中心である正法寺を示すものになる。

前述したように、中世後期の山門故実書は檀那院を脇門跡と記していたが、それはこのような経緯を経たものであった。『碧山日録』応仁二年（一四六八）八月四日条は「西兵、焼青蓮院・檀那院及寺舎民家無數、東山為之虚耗矣」と、応仁の乱で西軍によって青蓮院や檀那院が焼かれたことを記す。当然この檀那院は、比叡山の院家ではなく、京都東山の門跡をさしている。

なお門跡伝には、相巖の後に実承―寛家と続くが、第二章でふれたように、実承は継承順に大きな間違いがある。「寛家権僧正」^{〔三二二〕}元亨元年月 日任権僧正」とされている寛家は、『門葉記』などから、さまざまな法会に出仕した活動が知られるが、檀那院との関係は全く確認できない。誤って混入したものと考えらる。

（24）良証は、門跡伝には「永享四年六月十二日任権僧正」とあり、「横川検校、嘉吉元年八月辞之」と朱注する。歴代略記は記述を欠くが、「超私云、良証大僧正法性寺座主、今記脱之也」とする貼紙が付されており、真超は檀那院主良証の存在を確認し、このように書き加えている。『満濟准后日記』には、正長元年（一二二八）六月一三日の室町殿御所での

五壇法勤行をはじめ、檀那院僧正の名で頻繁に登場する。醍醐寺座主で幕政に深く関与した満濟を通じて、幕府とも近い関係にあったのである。『建内記』嘉吉元年（一二四一）八月二三日条は、良証の横川（首楞嚴院）検校交代を記しており、門跡伝の朱注と対応する。

『建内記』文安四年（一二四七）二月一六日条は、天台座主改補のいきさつを伝える。義承が前年の一月に座主を辞任して、空白が生まれており、「後進之理運者、妙法院僧正歟、其外檀那院已下未及宿老也、妙法院者以諸宮之御跡可云理運歟、浄土寺者前職也准三后、再任之号為後記所望也」と、妙法院教覚などの候補者をめぐる議論がなされ、結局新座主には毘沙門堂公承が就任する。この過程で檀那院良証の名もあがったのであるが、「未及宿老」とされた。良証は多くの重要法会に参加し、首楞嚴院検校などを歴任した人物であるが、この段階では脇門跡檀那院の地位が低下して、座主を出せる状況になかったであろう。菅浦文書においても、文安三年を過ぎた頃から、領主としての檀那院の姿はみえなくなっていく。

（25）澄巖は歴代略記にないが、門跡伝には、「澄巖」^{〔四八七〕}長享元年九月七日任大僧都、久我大納言執奏」とある。これは『親長卿記』同日条「檀那院法眼澄巖、大僧都事、^{納言弟}同奏聞、勅許」、および同二八日条「檀那院澄巖僧都^{久我大納言弟}来、先日正大僧都事勅許、祝着々々」と対応している。『公卿補任』によれば、長享元年には久我豊通は二九才で、正三位権大納言であり、彼の推挙で僧都であった弟の檀那院澄巖は大僧都に昇進した。父は従一位太政大臣の久我通博（一二二六―一二八二）であった。しかし他には関連史料が乏しく、経歴などもよくわからないが、年次から良証の直接の後継ではないと考えられる。事跡や継承関係がはっきりしな

いなど、もはや脇門跡としての系譜をたどることはできなくなる。⁽⁸⁹⁾

五、菅浦と檀那院・梶井門跡

菅浦の土地支配の骨格は檀那院―竹生島で、梶井門跡が檀那院を管轄していた。しかし実際のところ、菅浦はその狭小さもあって、檀那院にとっての経済的価値は、ほかの荘園などに比べて、きわめて小さかったと思われる。鎌倉末になると、日差・諸河の耕地開発が進んで、四町半ほどの田地や山島にまとまった年貢が賦課され〔菅〕七六など〕、「菅浦庄」という表現もみられるようになる〔菅〕七七八・一四七・六三二など〕。経済的価値の高まりと、門跡化という檀那院側の変化とが重なり、対大浦相論においても、供御人役支配系列に代って、檀那院―竹生島が前面に現れてくるのである。

まず最初に鎌倉末・南北朝初期の梶井の状況を確認しておこう。正慶二年（一三三三）一月、一二二世座主に梶井出身の後伏見天皇（持明院統）皇子尊胤（一二三〇六―五九）が就任する。前任の門主後醍醐天皇（大覚寺統）皇子尊雲は、幕府打倒のため、前年に還俗して護良親王となっているため、この時点では門主になっていたと考えてよい。隠岐に配流された後醍醐に代わって擁立された光厳天皇は異母弟であり、後醍醐が六月に帰京すると廢位される。尊胤も座主と門跡の管領を停止され、籠居させられるが、足利尊氏によって後醍醐が京を追われた建武三年（一三三六）一〇月には、座主と門主に復帰する。しかし弟直義との対立により、尊氏が観応二年（一三五二）に南朝に下って、南朝が京都を支配した際には、梶井門跡もその管理下に置かれた。同三年三月に尊

氏との和議が破れると、南朝は光厳・光明・崇光三上皇らとともに、尊胤をも楠木氏の勢力範囲であった河内国東条に連行してしまう。次いで吉野の賀名生に移されるが、尊胤は六月に脱出に成功して京都に戻り、門主に復帰する。尊胤は延文四年（一三五九）五月に入滅するが、その直前まで門主の地位にあったと考えられる。

次の門主後伏見天皇皇子承胤（一二三二―七）は、兄尊胤から灌頂をうけた弟子であったが、貞治三年（一二六四）七月の光厳上皇の入滅を機に、門跡を退去してしまう。その跡を継いだ承胤の弟子恒鎮法親王が、応安五年（一二七二）一月に門跡の侍に殺害されたため、再び承胤が門跡を継承し、永和三年（一二七七）四月に入滅する。⁽⁹⁰⁾この間、尊胤は四度、承胤は三度座主に就任するが、激しい政治的混乱に直面したのであり、門跡支配の立て直しにも尽力せねばならなかった。

菅浦では建武元年（一二三四）頃から、竹生島雑掌が大浦との相論で重要な役割を果たしていたが、同四年からは尊胤が関与し始める〔菅〕六二九へ）。観応以降、竹生島が檀那院末寺であることが強調され、「当浦者、為竹生嶋領、本所進止、御門跡累代御管領無相違之地也」〔菅〕一二二〕、「当浦者、為山門檀那院領、梶井二品親家御管領之地也」〔菅〕七七〇〕のように、梶井による檀那院―竹生島―菅浦の管領が強く主張され、尊胤が深く関わっているのである。

尊胤・承胤などの下で、重要な役割を担っているのが、承忠・恒忠兄弟であった。前述したように、祇園社別当は座主が補任権を有しており、座主交代ごとに配下の人物を任命していたが、文和元年（一二三二）一〇月一四日、尊胤四度目の座主就任にあたって、檀那院僧都承忠は祇園社別当に補任される。⁽⁹¹⁾公厳は、康永年間（一二四二―四五）には首

楞嚴院檢校を兼ねていたが、次の院主俊承との交代時期ははっきりせず、承忠との関係は不明である。これまで確認してきたように、各院主間の師弟・継承関係は明確であるが、承忠・恒忠は他の院主と接点がなく、師弟関係についての手がかりはない。康安元年（一三六一）一二月の承胤二度目の座主就任および貞治元年（一三六二）九月の桓鎮法親王の座主就任時にも、承忠が祇園社別当に補任される。菅浦文書には、文和二年（一三五三）三月一日や同八月二五日の光潤奉書（「菅」一五〇・七八六）、同三年五月八日の祐遍奉書（「菅」一〇四）など、光潤・祐遍を奉者とする多くの文書が残されており、これらは承忠の御教書と考えられる^②。

権大僧都恒忠は、永和二年（一三七六）閏七月の承胤三度目の座主就任時に祇園社別当になる^③。その少し前、応安元年（一三六八）十一月の従一位関白近衛道嗣男慈弁の浄土寺入室および同五年十一月の灌頂にいたり、実嚴は靈山法印・檀那院僧正として重要な役割を果たしており、前章で述べたように、康暦元年（一三七九）十一月の足利義詮追善結縁灌頂に、檀那院大阿闍梨として参加していた。この時点では檀那院・靈山の院主・門主であったと考えてよいだろう。しかし同年一月一六日に、光潤を奉者とする菅浦内日差・諸河の下知を命じた御教書（「菅」一八）が出されており、これは恒忠のもとと判断できる。檀那院に関わる実嚴と恒忠が、同時に活動しているのである。

永和二年に恒忠が祇園社別当に補任されたのは、檀那院主だったからではなく、座主との個人的関係からであろう。実嚴は檀那院・靈山のトップを兼ねていたが、靈山門跡を拠点に学僧として活躍しており、檀那院務への関与は希薄になっていたと推測できる。永和四年九月二〇日梶井

官政所下文案（「菅」七八四）で、檀那院主に代って、梶井政所が菅浦の雑掌を補任したのは、その関係であろう。一方恒忠は、兄承忠の後を受けて、檀那院を拠点に、梶井門跡の側近として活動していた。真超は貼紙で「恒忠、右称檀那院、但寺務斗也」と判断した。檀那院と称していても、院主ではなく、寺務（実務責任者）だけであつたのである。菅浦への文書発給も、梶井の下で寺務として行ったのではないか。実嚴との住み分けがなされ、檀那院の実務については恒忠に委ねられていたのであろう。恒忠の発給文書は、至徳四年（一三八七）までみられる（「菅」一九）が、前述したように、靈山での実嚴の活動は永徳二年（一二八二）までは確認できる^④。

次の院主は実嚴弟子の一五二世座主相嚴で、やや信憑性に欠けるものの、歴代略記で「永和三三年三月十八日任権僧正十八才、至徳元年四月廿日補一身阿闍梨廿四才」などとされている。「雑々例」によって年齢を四才高く修正する必要があるが、実嚴と相嚴の間に恒忠が入る余地はない。承忠については、院主であつた可能性は否定できないが、恒忠と同じく檀那院務の責任者と考えて矛盾はない。門跡伝・歴代略記のどちらにも記載がないことを考慮して、承忠・恒忠は院主系譜から除外した^⑤。

承忠・恒忠の意を奉じた文書の端裏には、「御教書案」「檀那院殿御教書案」などと記されたものが多く残る（「菅」一三・一七・一八・九九・一〇三・一〇四・一二・一二七・一五〇・七八六・七八七・七九二）。中河右馬助が日差・諸河を大浦内として譴責した延年間の事件に関する八月一九日友似書状（「菅」七九四）には、「たんな院殿より御教書を下され候」とあるが、これは同日の光潤の奉書（「菅」一）のことと思われる^⑥。このように承忠・恒忠の発給した文書は御教書と呼ばれていたが、これ

は清華大炊御門家出身で、檀那院を本拠とする高僧であったための表現と考えられる。⁽⁹⁸⁾ 菅浦文書において、このような御教書が集散的に現れるのは、承忠・恒忠の時期に限られる。

なお尊胤を檀那院宮と表現する史料が存在する。皇太子量仁親王（光厳）の元服に関する「元徳二年東宮御元服記」⁽⁹⁹⁾には、「仏事一字金輪法、阿闍梨檀那院宮、自廿二日被始行、供料傳沙汰」とある。この記述に関連して、『続史愚抄』元徳元年（一一三二）一二月二二日条は、「仏事一字金輪、阿闍梨檀那院宮云、按梶井尊胤法親王殿」と、檀那院宮を尊胤と推定する。また「御産御祈目録」⁽¹⁰⁰⁾には、建武二年（一一三五）の後醍醐中宮珣子内親王（新室町院）の出産に関わって、「金輪法檀那院宮尊胤、公家二月十日」とある。尊胤を檀那院宮とする認識がうかがえるのであるが、これは尊胤が側近を使って積極的に檀那院の運営に介入した事実からの表現であろう。

おわりに

暦応二年（一一三九）八月一〇日円宣紛失状（宝鏡寺文書）によれば、檀那院権少僧都円宣は比叡山上は火事の怖畏があるため、調度・文書を師匠である金輪院法印の白河住坊に預けたが、建武三年（一一三六）一月に炎上して、文書を悉く紛失したという。文和三年（一一三四）には、宿敵であった寺門円満院領大浦荘の雑掌に金輪院が補任され、菅浦を濫妨するという事件が起きる（菅一一三二）。金輪院は青蓮院門徒であり、門跡の枠を越えて、有力衆徒らの影響力が強められていたのである。時として、他権門と結びついて脅威となることすらあり、三門跡による山門支配体制は揺らぎつつあった。

足利義満以降、足利家の子弟が門跡に入室し、門主・座主となっていく。円明院・金輪院などの有力衆徒を山門使節に任命し、山門領内における検断権などを与えて衆徒の統制を図るなど、幕府と山門の経済的・政治的な関係が深められていくが、永享の山門騒動（一四三三―一四三四）では、有力衆徒は足利義教の武力弾圧を受け、根本中堂も焼失してしまう。幕府の影響力が増大する一方で、門跡の自立性は大幅に低下していくのである。菅浦と大浦の紛争は継続していたが、日差・諸河をめぐって激しく闘った文安二・三年（一四四五・六）頃から、日野家が領主となっており、その後は菅浦文書から檀那院や梶井門跡の姿は消えていく。竹生島も相論に協力しなくなり、「遠見」していると非難される（菅一〇七・一一五）が、やがて山門から離れ、地域的宗教勢力として独自の展開をみせる。この時期は（24）良証が史料に現れる最後の段階で、以後は檀那院主の継承関係もわからなくなってしまうのである。しかし菅浦には、新たな山門勢力が関与してくる。東塔東谷仏頂尾にあった花王院は古くからの院家であるが、室町後半には、急速にその政治力を高めていく。

このような経緯から、菅浦の多くの相論では、時期によって当事者が大きく変化している。そのため、さまざまな領主が関わり、交替していくかにみえ、領主を変更しうる、選べると評されることすらある。⁽¹⁰¹⁾ 確かに日吉杜神人などの身分も設定されているが、門跡体制が崩れていく一五世紀半ばまでは、梶井―檀那院―竹生島という土地支配体系に、供御人役をめぐる支配が重なるという基本的骨格は、変わってはいない。

応仁の乱によって、「焼青蓮院・檀那院及寺舎民家無數」（『碧山日録』応仁二年（一四六八）八月四日条）、「東山諸門跡悉以焼亡了」（『大乘院

日記目録」同日条」と、檀那院などの東山にあった諸門跡は焼失してしまふ。このような状況のなかで、脇門跡の多くは廃絶し、檀那院門跡も同じ運命をたどったと思われる。なお東塔東谷にあった檀那院本寺は近世まで存続したが、断絶の詳細は明らかではない。

注

- (1) 以下、菅浦文書の引用にあたっては、滋賀大学経済学部史料館編『菅浦文書』（有斐閣、一九六七年）の史料番号にしたがい、「菅」と略記する。
- (2) 『群書類従』二八
- (3) 黒田俊雄『寺社勢力』（岩波書店、一九八〇年）
- (4) 永村眞「総論中世寺院と「門跡」」（同編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版、二〇一七年）
- (5) 衣川仁「中世延暦寺の門跡と門徒」（『日本史研究』四五五、二〇〇〇年、のち『中世寺院勢力論』、吉川弘文館、二〇〇七年所収）・延暦寺三門跡の歴史的機能」（永村眞編『中世の門跡と公武権力』、注4）
- (6) 『群書類従』二八
- (7) 延暦寺の脇門跡については、下坂守「中世門跡寺院の組織と運営」（村井康彦編『公家と武家』、思文閣出版、一九九五年、のち『中世寺院社会の研究』、思文閣出版、二〇〇一年、所収）がふれている。
- (8) 『群書類従』九
- (9) 『続群書類従』二八下
- (10) 『校訂増補天台座主記』（第一書房、一九七三年）。以下、『天台座主記』の引用は同書による。
- (11) 『大正新修大藏経』図像部一一・一二（大蔵出版、一九三四年）。南北朝期に尊円入道親王が原型を編纂したと推定される。以下、『門葉記』の引用は同書による。
- (12) 以下、『華頂要略』一四五中絶門跡伝については、京都府立京都学・歴

彩館所蔵本による。渋谷慈鑑『日本天台宗年表』（第一書房、一九七三年）所収の檀那院門跡歴代は、この史料によると思われる。

- (13) 以下、『阿婆縛抄』の引用は、『大正新修大藏経』図像八・九による。
- (14) 『続群書類従』二七下・『大日本仏教全書』八六寺誌部四（鈴木学術財団、一九七三年）。寺島典人「延暦寺本『延暦寺三塔諸堂』」（『大津市歴史博物館研究紀要』一二、二〇〇五年）参照。
- (15) 『群書類従』二四。
- (16) 『群書類従』二四。原本の成立は鎌倉中期頃にさかのぼる可能性がある。
- (17) 『僧綱補任』については、平林盛得・小池一行編『僧歴綜覧』（笠間書院、二〇〇八年）参照。
- (18) 『門葉記』五三。以下、護持僧については同史料による。
- (19) 衣川仁「中世前期の延暦寺大衆」（『大山喬平教授退官記念会編『日本社会の史的構造』古代・中世、思文閣出版、一九九七年、のち『中世寺院勢力論』、注5所収）
- (20) 『僧綱補任』（『大日本仏教全書』六五史伝部四）。以下、『僧綱補任』は同書による。
- (21) 康和三年（一一〇一）一二月阿闍梨伝灯大法師某申文（『大日本史料』三編五）
- (22) 横田兼章「大原如来蔵における良忍上人関係史料」（『融通念仏宗教学研究』所収『良忍上人の研究』、百華苑、一九八一年）
- (23) 九条家本延喜式卷三九裏文書（『平安遺文』五五・二・五五三）
- (24) 『菅』六二九イ・六三八口、『鎌倉遺文』六四二。以下、『鎌倉遺文』は『鎌』と略記する。
- (25) 黒田日出男「竹生島神領菅浦の堺相論」（『中世荘園絵図の解釈学』（東京大学出版会、二〇〇〇年）は、相論の経緯などから、実遍紛失状案を偽文書とするが、本来の紛失状に、竹生島の記述を書き加えたものと判断する。
- (26) 院司僧の一人は、菅浦の土地寄進にも関わっていた（『菅』七九）。
- (27) 康正二年（一四五六）「造内裏段銭并国役引付」（『群書類従』二八）から、

- 近江国栗太郡に三カ所段銭三貫文分の檀那院門跡領の存在が知られる。
- (28) 妙法院領越前国織田荘の劔太神宮寺(織田寺)は、享徳二年(一四五三)に檀那院末寺となっている。『福井県史資料編』五(福井県、一九八五年) 劔神社文書。
- (29) 『慈悲大僧正拾遺伝』(『大日本史料』一編二三寛和元年一月三日条)
- (30) 水野章二「里山の成立」(吉川弘文館、二〇一五年)・「中世の環境と地域社会」(『LINK』地域・大学・文化』八、二〇一六年)
- (31) 下坂守「中世寺院における大衆と「惣寺」」(『学叢』一二二、二〇〇〇年、のち「中世寺院社会の研究」、注7所収)
- (32) 真超(のちの豪実)は、多数の天台関係聖教類を書写・収集し、その蔵書は叡山無動寺蔵に伝えられている。大屋徳城「集書家としての法曼院真超と正覚院豪実」(『叡山宗教』二一六、一九二一年)。
- (33) 胤海(一六一三―八九)は、天海の弟子で、伯耆大山寺や江戸寛永寺の学頭を勤めた学僧である。門跡より檀那院の号を与えられたが、檀那院との関係は知られていない。林京子「下野岩船山高勝寺「真名縁起」と檀那院胤海」(『山岳修験』六四、二〇一九年)参照。
- (34) 叡山文庫には、「檀那院別当記」(無動寺蔵)として一巻にされた檀那院関係の覚書類が伝えられている。一紙に記された年欠の檀那院々務次第や檀那院別当記などが含まれるが、近世以降のもので情報量は多くなく、門跡伝や歴代略記とは人数・順番が異なる。
- (35) 「僧綱補任抄出」(『群書類従』四)
- (36) 元禄一五年(一七〇二) 卍元師蛮撰。『大日本仏教全書』六三史伝部二。
- (37) 天台宗典刊行会『華頂要略』(大蔵出版、一九三五年)
- (38) 曼殊院文書(『大日本史料』六編一三)。「北野宮寺縁起」(『続群書類従』三上)とはほぼ一致しているが、縁起の別当次第には他に実承が加わっている。
- (39) 大塚紀弘「曼殊院門跡の成立と相承」(五味文彦・菊地大樹編『中世の寺院と都市・権力』、山川出版社、二〇〇七年)・「中世の曼殊院門跡」(永村真編『中世の門跡と公武権力』、注4)
- (40) 長算・仁運の経歴については、武居明男「北野別当に関する基礎的考察」(『人文学』一七〇、二〇〇一年)にもふれられている。
- (41) 『尊卑分脉』には、経輔の子孫に該当者はいない。康平元年(一〇五八)に死去した正四位下皇后宮権大夫藤原良経の子に「阿闍梨経寿」が存在するが、山門との関係は不明である。
- (42) 康和三年(一一〇一) 二月阿闍梨伝灯大法師某申文(注21)
- (43) 水戸彰考館蔵二冊本「僧綱補任」
- (44) 歴代略記には相豪―良喜―実遍―良基とあるが、『尊卑分脉』は良喜は改名して良基とする。歴代略記は、良基を「権大僧都良覚男 法眼早世」とするが、該当者は確認できない。一方、良喜は「大蔵卿通基朝臣男」としており、高山寺旧蔵「究竟僧綱補任」応保元年(一一六一)の「法橋、山、通基息」や『尊卑分脉』の記述と一致する。改名による誤解と判断できる。
- (45) (22) 実厳が応安六年(一二七三)に撰作した『山密往来』の閏一二月返状は、「当門室」(檀那院) 関係の護持僧として、興良・仁運・相豪・親源らとともに、仁操の名もあげている。仁操を檀那院の系統に位置づける意識が存在していたようである。
- (46) 『門葉記』元久元年(一二〇四)の青蓮院慈円による如法経法会に隆性阿闍梨がみえるが、同一人物とは断定できなかった。なお歴代略記では長尋―公誉―長倫―隆性となっているが、(14) 公誉の年齢から、隆性の次と推定した。
- (47) 正元二年(一二六〇) 一月、園城寺戒壇設立に反対して山門大衆が蜂起し、朝廷が勅許を撤回する事件がおきた。門徒僧綱や京都・住山の高僧らは山門大講堂で会合して、起請文を作成したが、そこに法印公誉の名がみえる(『天台座主記』)。兄の前大僧正公豪らとともに「此三人雖連名不出集会席」とされており、(14) 公誉と判断できる。
- (48) 延暦寺首楞嚴院檢校治院非一期勘例(『京都御所東山御文庫所藏延暦寺文書』一二、八木書店、二〇一二年)。同文書は延徳二年(一二四九)の首楞嚴院檢校の交代に関連して作成されたと推定され、歴代の檢校

が記載されている。以下、首楞嚴院檢校についてはこの史料にもとづく。
なお(14)公誉は『尊卑分脉』に楞嚴院檢校とされているが、(16)公
誉の誤りと思われる。

(49)「菅」四七・「鎌」二〇七二五

(50)「菅」三二四・七四五、「鎌」二二七〇四

(51)年欠一二月六日真当所領寄進状(鹿王院文書研究会『鹿王院文書の研
究』、思文閣、二〇〇〇年、所収鹿王院文書一三二)・小六条敷地文書
正文目録(同一五九)

(52)称名寺聖教一一八函「両界入三摩地口決」奥書に、「宝治二年六月十八
日以岡崎法印御房之御本於靈山坊令書写 沙門公誉三十一歳」とあり、安
貞三年・寛喜元年(一二二九)生まれとなる。松田宣史『「法花経」利
益説話から往生説話へ』(『天台恵檀両流の僧と唱道』、三弥井書店、
二〇一五年)。

(53)たとえば第七箱「双身許可」(三千院門跡資料室編『三千院円融藏文
書目録』、三千院門跡円融房出版部、一九八四年)の奥書に、正嘉二
年(一二五八)の公誉の写本を、弘安二年(一二七九)親源、延文二
年(一三五七)実厳、応安七年(一三七四)相厳が、それぞれ靈山で
書写した記述があるのをはじめ、靈山で著述・書写された聖教類は多
く残されている。渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』(法蔵館、
一九七八年)。

(54)『新日本古典文学大系25』(岩波書店、一九九一年)。写本によつては靈
山に代わつて高野山が入っている場合があり、京都東山の靈山寺のこ
とと考えられている。

(55)『道濟集』二六〇、「後拾遺和歌集」五五三、「能因集」三九など。

(56)『新続古今和歌集』一六〇〇は、中原師尚が「東山靈山といふ所に、墳
墓の地をしめむとてまづ見にまかりてよみける」とある。

(57)『太平記』(西源院本)卷一五・二九・三二、「園太暦」文和二年(一二五三)
六月七日条など。

(58)「山家集」五二七は、靈山からの雪の朝の眺望を詠んだもので、「本朝

無題詩」(『群書類従』九)にも、藤原明衡の漢詩「暮春遊靈山寺」が
収録されている。

(59)一四世紀前半作成知恩院藏「法然上人行状絵図」など

(60)国阿上人絵伝(『大日本史料』七編七応永二年九月一日条)。靈
山寺本堂は寛平の宇多天皇の建立とする。同史料については、林讓
「時宗国阿・靈山両派派祖国阿弥陀仏伝記史料の再検討」(『国史学』
一一三、一九八一年)参照。

(61)大橋俊雄「室町期における教団の展開」(『時宗の成立と展開』、吉川弘
文館、一九七三年)、金井清光「靈山派・国阿派」(『遍と時衆教団』、
角川書店、一九七五年)

(62)林讓「南北朝期における京都の時衆の一動向」(『日本歴史』
四〇三、一九八一年)、小野澤眞「中世都城における聖の展開」(五味文
彦・菊地大樹編『中世の寺院と都市・権力』、山川出版社、二〇〇七年)

(63)『日本思想大系7 往生伝 法華驗記』(岩波書店、一九七四年)

(64)『大日本仏教全書』六三史伝部二

(65)『殿暦』同日条にも、この堂供養の記事がある。

(66)『阿婆縛抄』や『門葉記』には、保延六年(一一四〇)一〇月二三日に
土御門内裏で安鎮法を修した僧の中に定兼の名がみえるが、同年八月
に往生した定兼とは別人となる。

(67)良喜の師仁操は白河院の弟輔仁親王の子であり、祇園女御・阿弥陀院
と関係があったのかもしれない。

(68)年未詳靈山門跡相承次第(叡山文庫所藏、注34)は、「靈山門跡 在洛
東、本坊東谷阿弥陀院、代々補檀那院別当」とする。延暦寺東塔東谷
の檀那院が靈山門跡の本坊で、阿弥陀院の別当を兼ねたことが、誤つ
て記されたと考えられる。

(69)(11)長愉の父・(12)長尋の祖父で、有能な実務官僚であった藤原定
長(一一四九〜一一九五)が、「靈山」(『尊卑分脉』・『経俊卿記』建長
六年(一二五四)七月一三日条など)と号したのも、阿弥陀院との関
係からであろう。

- (70) 三保サト子「山密往来」(『寺院文化圏と古往来の研究』、笠間書院、二〇〇三年)
- (71) 国学院大学久我家文書編纂委員会「久我家文書」一(統群書類従完成会、一九八二年)三四・「鎌」二八六四二
- (72) 康永元年(一三四二)七月一日慶清請文(『久我家文書』一・六〇)
- (73) 歴代略記には、雲助―親源―俊承―親厳―公厳となっているが、雲助と親源は明らかに子弟関係が逆である。親厳も山門関係には該当者はおらず、親源などとの混乱による混入と思われる。
- (74) なお『尊卑分脉』には、一代後の従二位権中納言西園寺実平(一二五一?)の子にも雲助が記され、「山、檀那院、僧正、親源僧正資」と注記が重複している。歴代略記には、「京極内大臣公基公男」として、「文永四年四月 日転大僧都」以下、詳しい経歴が記されているが、弘安七年(一二八〇)五月一〇日遷化とするなど、他の記録と矛盾する記述もみられる。
- (75) 『八坂神社文書』下二三〇(八坂神社社務所、一九四〇年)
- (76) 福真陸城「祇園別当の成立と変遷」(『ヒストリア』一五一、一九九六年)、下坂守「中世門跡寺院の歴史的機能」(『学叢』二二、一九九九年、のち『中世寺院社会の研究』、注7所収)
- (77) 『師守記』・『大日本史料』六編八
- (78) 九月四日光厳上皇院宣案(『祇園社記』続録第九・『八坂神社文書』下一四九九)は、摂津国金心寺の田嶋をめぐる祇園社大座の松鶴女と萱禪尼の相論に関するもので、靈山僧正御房宛となっている。内容から貞和四年(一三四八)頃のはずであるが、この時期の祇園社別当は猪熊良聖で、靈山僧正公厳ではない。他の関連する光厳上皇院宣はすべて祇園別当法印御坊に宛てられており、不審である。
- (79) 『統群書類従』六上
- (80) 葛川明王院文書文保元年(一二二七)十一月一日俊承奉書案(『鎌倉遺文』二六四三五)に権律師俊承がみえるが、葛川は青蓮院領であり、別人と思われる。
- (81) 『京都御所東山御文庫所藏延暦寺文書』六
- (82) 『康暦元年結縁灌頂記』(『統群書類従』二六上)
- (83) 故福田堯頼大僧正藏(『昭和現存天台書籍綜合目録』、注53)。「伝法灌頂口決」(『三千院円融藏文書目録』第三箱)など、同月に靈山で清書されたものは何冊も残されている。
- (84) 『昭和現存天台書籍綜合目録』(注53)
- (85) 下坂守「中世門跡寺院の歴史的機能」(注76)
- (86) 第七箱「三摩耶戒」・桐箱「三摩耶戒儀」(『三千院円融藏文書目録』、注53)などの奥書から、実厳が文和四年(一二三五)には靈山で活動していたことが確認できる。
- (87) 『大日本史料』七編二〇応永二年(一四一四)九月八日条
- (88) 第七箱「不動三身許可印」「不動灌頂密印」(『三千院円融藏文書目録』、注53)などの奥書から、良証は応永十三年(一四〇六)頃の生まれで、年齢的には全く問題はない。
- (89) 歴代略記は次に証嚴僧正を記すが、記事は何もない。『天台座主記』一六一世二品堯胤親王の項で、永正九年(一五二二)九月二三日の後土御門院十三回聖忌の懺法講導師に「証嚴僧正檀那院」がみえ、「後土御門院十三回聖忌記」(『群書類従』二四)も、檀那院証嚴僧正の名を記す。「檀那院僧正」に宛てた同月一三日の後柏原天皇御懺法講繪旨(『三千院円融藏文書目録』第二箱、注53)もこれに関連するものと思われる。しかし院家としての実態は不明で、系譜も復原不能である。
- (90) 『天台座主記』・「天台正嫡梶井門跡略系譜」(『統群書類従』四下)。稲葉伸道「南北朝・室町期の門跡継承と安堵」(稲葉編『中世寺社と国家・地域・史料』、法蔵館、二〇一七年、のち『日本中世の王朝・幕府と寺社』、吉川弘文館、二〇一九年、所収)参照。尊胤については、村山修一「比叡山史」(『東京美術』、一九九四年)もふれている。
- (91) 『祇園社記』続録第三別當御吉書以前御得分并目代分執行管領事(『八坂神社記録』四)など。
- (92) 下坂注76論文。

(93) 「祇園社記」二三・永和二年（一三七六）閏七月感神院政所下文（『八坂神社文書』上八五一）

(94) 『後深心院関白記』応安元年（一二六八）一月二四日条・同五年四月七日条

(95) 場所が明記されていないものでは、「胎諸会」（真如藏）・「胎藏界諸会」（無動寺藏）など、至徳二年（一二八五）まで確認できる。『昭和現存天台書籍綜合目録』（注53）。

(96) 檀那院々務次第・檀那院別当記（注34）は、檀那院主を考証したメモ的な覚書であるが、そのなかに「恒忠」とともに「永忠」が記され、「恒忠弟也」とする。

(97) 同じく、延文四年（一二五九）と推定される閏四月八日友康書状（「菅」二九〇）に、「蓑浦へ檀那院殿よりの御教書を下され候」とあるのは、同年三月一五日の祐遍の奉書（「菅」一二七・一二三三）と考えられる。

(98) 熊谷隆之「御教書・奉書・書下」（上横手雅敬編『鎌倉時代の権力と制度』、思文閣出版、二〇〇八年）は、御教書は三位以上の奉書とは限らず、奉書が直状かも知わず、あくまで「頭貴の書札」をさすとする。

(99) 『統群書類従』一一上。末尾の「元徳雜事」は日野資名「資名卿記」の抄出である。

(100) 『統群書類従』三三三下

(101) 竹生島文書中に、次のような文書が存在する（『市立長浜城歴史博物館年報』三、一九八九年）。

（付箋）「檀那院殿令旨法橋行増奉」

当寺別当職并寺領等事、檀那院殿 令旨案如此、任先例可被存知、且又寺領御年貢等事、所被下御力者也、殊可被存知行之由、依（「」僧都御房御気色、執達如件、

「至徳二年」九月十七日

法橋行増奉

竹生嶋寺僧等御中

至徳二年（一二八五）は実厳・恒忠の活動時期で、直接の上下関係にある梶井―檀那院―竹生島間で、「檀那院殿 令旨」という誤った表現

がみられるのは不審である。梶井と檀那院を混同しているのである。なお貞和五年（一二四九）の近江守護方某注進状案（「菅」七六五）

に、「檀那院宮之雜掌」という表現があるが、他の箇所や関連する「菅」一二五九では、「檀那院雜掌」となっており、書き誤りと思われる。

(102) 金輪院については、下坂守「山門使節制度の成立と展開」（『史林』五八一、一九七五年、のち『中世寺院社会の研究』、注7所収）がふれている。

(103) 下坂注102論文。

(104) 蔵持重裕『中世村の歴史語り』（吉川弘文館、二〇〇二年）、太田浩司「中世菅浦の景観」（『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』四九（二〇一六年）など。

【付記】本稿はJSPS科研費 JP21H04360の助成による研究成果の一部である。